

「想像の見世物箱」

スミス氏は誰からも「有徳の手本」として尊敬される老紳士だったが、或晩、肘掛椅子に身體を沈め芳醇なワインを飲んでゐると、突然、三人の客が訪れた。繪の見世物箱を背負ふ「想像」、大冊の本を小脇に抱へる「記憶」、暗い色の外套を羽織つて顔も身體も隠した「良心」の三人であつた。

まづ、「想像」が見世物箱を卓上に置き、スミス氏に或る繪を見せた。若者が「高慢ちきな微笑を浮べ、眼には勝利の色を輝かせて」、跪く少女を見下してゐる繪で、少女は「恥辱と苦惱」に壓し拉がれてゐる様子だったが、哀願する少女の「苦悶に痙攣してゐるきやしやな身體の美しさ」を若者は冷淡に見遣る許りで、彼はさながら「輕侮そのものの化身であつた」。處が、若者をよく見ると、何とそれは若き日のスミス氏自身で、少女は初戀の相手ではないか。何たる繪だとしてスミス氏が憤慨すると、「記憶」が本の中からその繪に該當する頁を見附けて

讀み上げた。次いで「良心」が隠してゐた顔を表し、スミス氏の心臓に短劍を突き刺した。致命的ではなかつたが、實に耐へ難い痛みであつた。

見世物は猶も續き、「想像」が示す繪はスミス氏に「惡意を抱」く畫家の手になるものとしか思へぬ類許りで、それらによれば、かつてのスミス氏は初戀の娘を陵辱した許りか、些細な喧嘩が因で親友を殺害し、幼い孤兒から狡猾に遺産を略奪した卑劣漢なのであつた。無論、それらは何れも「實際の行動としては現はれなかつた罪深い思念の記録」に過ぎず、スミス氏が實際に犯罪を「少しでも犯したといふやうな證據の片影さへ」、如何なる「地上の法廷」に於ても擧げる事の出來ぬ類の事柄でしかなかつた。けれども、彼の「心の祕密」の最深部を知悉する畫家の描いた繪であるには違ひなく、到頭スミス氏は「良心」が突き刺す短劍の痛みに耐へ兼ねて大聲を發した。すると、三人の客は忽然として消え失せた。夢であつた。作品はかう結ばれてゐる、「人間はたとひその手は綺麗であつても」心は去來する「惡の幻想に汚れてゐる」のだから、「最も罪深い者」に對してさへも己れは「同類でない」と斷定してはならぬ。

天國の扉を叩く時、誰もが天國に入る資格がある程の無垢な生涯を送りはしなかつたと痛感するに相違ない。「懺悔して跪拜しなければならぬし、神の恩寵がその玉座の脚臺から」齋さ

れねばならない、さもなくば天國の扉は決して開かれぬであらう。

作者ホーソンにとつては、人間が救済される爲には「懺悔の心」のみならず、「神の恩寵」が必須の條件であつた。それは詰り、人間の力を以てしては如何とも爲し難い宿命の軛くびきの下に如何なる人間も置かれてゐると、彼が信じてゐたといふ事に他ならない。主人公が「スミス氏」といふ平凡々たる名前を與へられてゐるのは決して偶然ではない。彼は *everybody* なのであつて、心の奥底を問題にする限り、なんぴとも「最も罪深い者」の「同類」たる可能性を免れない、斷じて例外は無い、さうホーソンは云ひたいのだ。そして、例外は無い、となれば、これを書く私も、これを讀む全ての讀者も、心の奥底には「最も罪深い者」の「同類」の心を祕めてゐる、といふ事にならざるを得ない。しかもホーソンは「優しい少年」に於て、友を虐待する子供の獸性の爆發を頗る衝撃的に描いた。子供だとして人間、心中には惡魔が潛むと信じたからだ。「最惡の事態に對處し得る人生觀」が吾國には缺けてゐると、嘗て福田恆存は書いた。己が心中の「最惡の事態」を直視して已やまぬホーソンの如き作家を生んだアメリカの本質を、吾々日本人は殆ど理解してゐない。

(柏倉俊三譯、「トワイヌ・トルド・テールズ」、角川文庫)